

シベリウスは好き？

昔からデスクワークをする時には NHK の FM を聴きながら、ということが多い。色々なジャンルの音楽、色々な作曲家の音楽、色々な演奏家の音楽を背景音として聴く。時には手作業の内容やその日の気分にあわない音楽が流れることもあるが、そういう時には好きな CD に切り替えてしまう。

「名曲の楽しみ・・・吉田秀和・・・」というたどたどしい語り口で始まる番組が最も内容が濃くて楽しみだった。今時こんな不器用な話し方をするおじさんに一時間ほどの番組を任せてしまうとは・・・、NHK は何を考えているんだろう？初めてこの番組に接した時の印象はこうだった。ところが、聴き始めるとその中身の濃さに驚き、引き込まれて何年にもなった。このたどたどしい語り口のおじさんは、著名な音楽評論家の吉田秀和氏だと知ったのは数回聴いた後だった。この番組は、吉田秀和氏の逝去(98歳)をもって終りになってしまったが、以後これだけの内容の番組は存在しないようである。特定の作曲家、特定の曲、特定の分野の音楽などに焦点を絞って、具体的な(大変興味深い)解説をしながら番組が進んで行く。今でも時々吉田氏を偲ぶ特別番組があり、昔の録音を切り取って再放送したりしているようだ。

いつのことだったか忘れたが、シベリウスの特集を聴いたことがあった。シベリウスの曲は、学生時代に「北欧の作曲家」の名曲「フィンランディア」と教わり、コンサートなどでも何度か聴いたことがあったが、その他の曲は「ツオネラの白鳥」ぐらいしか知らなかった。この番組を通じて何曲かを聴いたことがきっかけとなって、私の「シベリウス好き」が始まった。

何か良い CD があったら買いたいと思って街へ出たが、「昔でいうレコードショップ」なるものが街には存在しなくなってしまった。たまに見つけたお店に飛び込んでみてもクラシック音楽は片隅に寄せられた感じで、しかも作曲家別分類のインデックスに「シベリウス」が載っている店はあまりなかった。

そして CD 探しの旅は「この街ならあるに違いない」と神田まで進むことになった。半日かかって探し歩いた結果、新品も中古も取り扱っている CD 専門の店に辿り着いた。新品から輸入物や中古品まで猛烈な数の CD が棚にぎっしりと詰め込まれており、輸入物には日本語の表記ラベルも貼ってないので、眼鏡を出して中腰で探しまくらねばならない。この日に買い求めたものは、交響詩フィンランディアほか何曲かからなる CD 一枚(ハレ管弦楽団・指揮ジョン・バルビローリ)と、交響曲第一番から第七番までが収められた CD 三枚セット(ロイヤル・ストックホルムフィル・指揮シクステン・アーリング)。

<1> 交響詩「フィンランディア」作品26を楽しむ

深い地中に埋もれていた何かが盛り上がり湧き出て来るかのような旋律を、重厚な金管楽器が奏でてこの曲は始まる、そしてそのバックを操るティンパニの重い響きで序奏が進んで行く。聴く人を圧倒して引きずり込むかのように・・・。そして次には木管楽器と弦楽器の優しい旋律で落ち着かされるが、ここでもティンパニが後ろで静かにリードしながらバックアップ。そして、弦楽器を中心とした穏やかな旋律に聴き惚れていると突如トランペットに導かれて前段のフレーズをリフレインするような流れに移る。

あれよあれよと言う間に弦楽器を含むすべての楽器が見事な旋律を歌い出す。ここでも色々な打楽器が大きな役割を果たし続ける。そして・・・驚きの内に曲はどんどん先に進んで行く。

管楽器・弦楽器・打楽器のそれぞれの特徴を遺憾なく発揮して、交響詩「フィンランディア」という映像が脳裏を走って行く。

フィンランディアが作曲されたのは 1899 年、この頃のフィンランドは帝政ロシアの圧政下で独立に向かった動きが起こっていた。作曲当初は「フィンランドは目覚める」という曲名で、ロシア政府から演奏禁止の処分も受けたらしい。

フィンランドという国の美しさと苦難の歴史とを交響詩として歌い上げたということだろうか。

静かな部屋の中で、一人でじっくりと聴き終えると、啞然とも呆然言えるような心境になって来る印象に残る一曲である。

<2> フィンランディアの後に続く曲

フィンランディアの次に出て来る曲は「カレリヤ組曲」。新婚旅行に行ったカレリヤで得た、この地に伝わる民謡や伝説・伝承をベースにして曲が作られたという。カレリヤはフィン人の発祥の地らしい。

これも、管楽器と打楽器の素晴らしいコンビネーションに静かに寄り添うような弦楽器の音色が美しく、引きこまれる曲である。

カレリヤはフィンランドの東隣、ロシア連邦の共和国のひとつ。地図を見ると河川と湖沼が沢山あって美しい風景が想像できる。その昔はスウェーデンに支配されていたが、後にロシアに併合された。フィンランドとロシアとの戦いの歴史もあり、必ずしも平坦な道のりではなかったように思える。

次に入っている曲は「交響詩ポホヨラの娘」。チェロの低い響きが、この曲を静かに始める。追走するように管楽器が、そしてバイオリンが・・・、そしてオーケストラ全体が唄うようになる。フィンランディアやカレリヤ組曲にはなかった流れで、静かに静かに曲が進んで行く。そしてハープの爪弾きが目が覚めるように・・・、弦楽器のピチカートが・・・。フィンランドの民族叙事詩「カレワラ」に基づく物語が音楽として表現されており、英雄ヴァイナモイネンと北国ポホヨラの娘のやりとりを描いている。ポホヨラは伝説・神話上の地名で、「北」を意味する言葉で、病気や天災を起こす源とも言われている。それぞれの楽器の特徴を活かして静かに語りかけるように流れて行くのが心地よいが、話の筋書きはかなり深刻な内容のようだ。

次の曲は「悲しき円舞曲」。チェロだろうかコントラバスだろうか、静かな響きが曲の始まりで、やがてバイオリンが加わって静かな三拍子が囁くように流れる。やがて管弦楽器のハーモニーが始まり、踊るような明るさに包まれていく。ウィннаワルツとはちょっと違う雰囲気優雅さが漂い、うっとりしているうちに、5分ちょっとのこの曲は終りになってしまう。

この CD の最後の曲は「レミンカイネンの帰郷」（「交響詩四つの伝説曲」から）。ドーンというティンパニの響きで始まり、静かな演奏が弦楽器のピチカートを交えながら大きく膨らんでくる。管楽器のさえずり、弦楽器のささやき、打楽器のアクセントが巧みに繰り返されながら旋律が膨らんで行く。楽器同士が会話をするようで、引きこまれるような面白い曲である。

この曲も民族叙事詩「カレワラ」に基づく物語を表した曲で、レミンカイネンとポホヨラの娘のやりとりを描いている。

<3> 交響曲第一番から第七番まで

「思い切って買ってしまえ」と、勢いに乗って買った CD は交響曲第一番から第七番までが入った三枚組のセット。Made in Germany, Warner music manufacturing Europe と書いてあった。家に帰って中を開いて見たら、ドイツ語と英語で書かれたやや厚めの解説書が出て来て驚いたが、梱包の一番後ろに、辛うじて日本語に翻訳した説明書が付いていた。

CD 一枚の容量と曲の長さとの関係と思われるが、CD#1=交響曲第一番・第五番、CD#2=交響曲第二番・第四番、CD#3=交響曲第三番・第六番・第七番という変則的な組み合わせになっていた。交響曲第一番から番号順に聞いて行ったら面白だろうなと思ったが、それは少々面倒な操作が必要だった。

<Appendix>

Jean Sibelius (1865.12.8~1957.9.20) 略歴・・・(Wikipedia より抜粋・引用)

ヘルシンキの北 100Km ほどのハメーンリンナに生まれた。父親は医師だが、二歳の時に死別。

1875 年 (10 歳) 最初の作曲。

1885 年 (20 歳) ヘルシンキ音楽院で作曲などを学び始める。

1889 年 (24 歳) ベルリンに留学、後にウィーン音楽院へ。

1892 年 (27 歳) アイノ・ヤルネフェルトと結婚。

1899 年 (34 歳) 「愛国記念劇」の音楽を発表、これが後に「フィンランディア」となる。

1957 年 (91 歳) 脳出血により死去。国葬が営まれ、肖像はフィンランドの紙幣にも使われた。

姉・弟もピアノ・チェロの演奏をした。